

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.105『支援者養成研修への提案 4』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 △ お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止

2. 支援ノートNo.105『支援者養成研修への提案 4』

● 援助者適性問題から逃げるな

支援ノートNo.102から、都道府県が公的に実施している『強度行動障害支援者養成研修』の資料を題材にして、研修の改善提案という意図をもって、この文章を書いています。今回はその4回目ですが、実はこのテーマで文章を書くことは容易ではありません。なぜなら、この仕事に従事している支援者（研修を実施する者を含む）が、支援者を養成できるだけの高い見識を持つに至っているのかということについては、僕自身はもちろんのこと、世界的に見ても心もとないからです。

他のどんな職業にもあるように、障害福祉に従事する援助者にも適性というものがあります。しかし、この適性を身につけるといふ課題について、僕も含めた従事者たちが偉そうなことを言える段階に達しているのかというと、到底そのようなことは言えません。実際、当該研修では支援者の適性問題について、彼らの人生を左右するくらいに重要なことであるにもかかわらず、不問に付しています。おそらく研修主催者である都道府県は、(好意的に考えて)これを不問に付していいと判断しているのではなく、この問題に切り込めるだけの見識がないために、敢えて触れないでいるのだと思います。もちろん、僕自身もエキスパートではありません。従って、これまで僕がこの支援ノートを通じて述べてきたことは、どれも至って平凡なことばかりです。また、それは今回もそうでしょう。

障害福祉における援助者の任務や眼差しというものは、崇高なことでもなければ神がかったものでもありません。昔から言われるように非凡とは平凡を積み重ねた上に現れる姿

であって、それを求めて得ようとしても空しいだけです。所詮、文章にできる程度の専門性というものは、高度な平凡性であるにすぎません。従って、ここに書くことは、普通の援助者ができる最低限度のことだと思います。

仮に、障害福祉の理念として「すべての人々の孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」という、ソーシャルインクルージョンの定義を掲げてみたとして、僕らはそこに向かって歩むことを否定しません。しかし、少なくとも僕は、この遠大な目標がすぐに実現できるものであるかのように吹聴し、正面から突破できるかのようにまくし立てる人を信じる気にはなれません。むしろ僕は、そのような妄信的な正面攻撃を無謀と考え、手近にある地味な可能性に挑むことを積み重ねるほうを選びます。

良い援助者は、相手に対して「おだやかなオプティミズムで修正されたリアリズム」をもって接していることが多いようです。リアリズムとは、援助者が相手に対して「ひいきの引き倒し」をしてしまい、相手を破滅に追い込むことを回避するためのしなやかな背骨であり、現場感覚そのものだと言っていいでしょう。

● 想像力の特性（特性確認シートより）

さて、この前段をふまえ、前回に引き続き、当該研修で使用されている『特性確認シート』の内容を検証していこうと思います。前回まで（No.102～No.103）の間に、特性確認シートの4項目、つまり「社会性」「コミュニケーション」「想像力」「感覚」のうち、「社会性」「コミュニケーション」までが終わりました。No.102～No.103については、令和6年2月15日現在、まだホームページ上に置いてありますので、必要に応じて参照してください。

今回は、「想像力」の項目について検討してみたいと思います。この「想像力の特性」というのは、1966年にローナ・ウィングが提唱した『三つ組』と呼ばれる概念の中にあるものの一つです。『三つ組』については、支援ノートNo.103に説明しましたので、そちらを参照してください。「想像力の特性」は、俗に言う「こだわり」という形で障害になってくることが多いので知られています。あるいは、状況判断や臨機応変な対応ができなかったり、先を見通しづらかったりという形で出ることも多いでしょう。この研修においては次のような例をあげて説明されています。

- ①自分で予定を立てることが難しい
 - ・段取りを適切に組むことが難しい
 - ・なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
 - ・今やることを自分で判断することが難しい
- ②変化への対応が難しい
 - ・先の予測をすることが難しい
 - ・臨機応変に判断することが難しい
 - ・自分のやり方から抜け出すことが難しい
- ③物の一部に対する強い興味
 - ・興味・関心が狭くて強い
 - ・細部が気になり違いに敏感

・少しの違いで大きな不安を感じる

なお、この研修では「想像力」という言葉を「目の前にないことをイメージする力」と定義しています。

と、ここまで転記し解説してきましたが、議論の対象にすらならないお題目に過ぎないことがよくわかりましたので、もう少し実践に役立つ情報を僕が勝手に書き足したいと思います。どれも、当たり前なことばかりで、新しい情報ではありませんが、当該研修の内容より多少はマシなのではないかと思い、キーを叩きます。

● こだわりイロイロ

自閉スペクトラム症の人が社会と折り合えない場合、しばしばその理由が「こだわり」であることが多いと思います。よく、「こだわりには二種類ある。一つは他者を巻き込むこだわり、もう一つは巻き込まないこだわり」などと分けて語る人がいます。そして、周囲を巻き込むこだわりのほうが手強いと思われることが多いのではないのでしょうか。確かに、職業援助者にとっても家族にとっても、周囲を巻き込まないこだわりは、当座放置しておけます。それどころか、「おとなしくていい子だ」などと呑気なことを言われる場合すらあります。しかし、巻き込み型のこだわりが問題で、そうでないこだわりは放置しておいていいのかというと、そういうものではありません。その理由は次にあげる通りです。

まず第一に、同一パターンの変化がない生活は、たとえ他者に迷惑をかけていなかったとしても、本人が新たなことに会おうチャンスを徹底的に少なくするため、これを放置しておく、本人の人生における幅と質の広がりや深まりがなくなるという不利益が生じます。例えて言えば、人生から序破急や起承転結を取り除き、その時間をのっぺらぼうにしているようなものです。人が体験する序破急や起承転結という経過は、細胞レベルに置き換えると「新陳代謝」だと言えないでしょうか。同一パターンの変化がない生活を放置したり、(当該研修のように?)積極的に勧めたりすることは、新陳代謝を止めようとしているようなものだという言い方は、的を外してはいないでしょう。生物にとって、新陳代謝の停止は死を意味します。皮膚も、筋肉も、内臓も、中枢神経も、心も、全て同じです。こだわりを浅い考えで放置し、支援者が楽をするために狭い同一パターンで生きることを相手に勧めるのであれば、それは相手の人生に目鼻をつけることを諦めさせることに等しいのです。しかし現実には、当該研修や、後述する『強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書』のような公的な文書内容を根拠に、触らぬ神に祟りなしとも言わんばかりの態度の不介入方針を正当化する施設や支援者が多数派なのです。逆に、多数派からの嘲笑に負けず、己の援助活動に対する懐疑と闘い、相手の生活世界が拡大する様を見て、相手と喜びを共有することに励まされながら相手と関わりあい続ける援助者は少数派なのです。

第二に、本人の生き方にベースチェンジが起きない限り、他者を巻き込まないこだわりが他者を巻き込むこだわりへと発達し、さらには梅雨前線のように居座って、長期間にわたって雨を降らせません。勘のいい援助者は、そうなる前の段階で介入して、生産性のない自己破壊的なこだわり行動を別の意味ある合目的行動に差し替えてしまうでしょう。ビギナー援助者は、この展開を予測できないので、梅雨が来てから慌てます。援助者のスキルが上がるまでは、仕方のないことだと思います。しかし、慌てていてもしょうがないの

で、梅雨明けに気持ちよくスタートが切れるように、合目的行動に集中する時間を増やしていき取り組みをします。その際、急激にそれが増えることを期待しないことです。地道で平凡な努力の積み重ねを続ける覚悟をもつことです。それが相手に伝わり、ペースチェンジ（季節変わり）が起こることも間々あります。

第三に、周囲を巻き込まないこだわりであったとしても、ある程度の発達段階に達したときに、強迫神経症に近い困難性と悩みを呈するようになることが多いことをあげます。当該研修においては、想像力の特性を「目の前にないことをイメージする力」と定義していますが、これが完全に欠落している人や全く発達しない人にお目にかかることはありません。つまり、彼らとて、どんなに歪（いびつ）な生活体験であっても、それを通じて想像力は発達します。援助する側の不手際により、それが歪んだ形になることはあるにせよ、発達はするのです。ところが、その想像力がはなはだ不完全であり、細部は全く想像できていません。そこで、再び不確実な予測を立てざるを得なくなり、より一層不安になります。不安を解消するための心理的戦略が、意識性を高めることであり、それをするにより更に細かいところが気になるようになるというループにはまっていきます。これは、No.104で説明した森田療法に説明されるどころの「精神交互作用」です。このループにはまると、意識性を高めれば高めるほど不安は痙攣的に増大していくわけです。想像力が発達し、一定程度メタ認知できる力がつくと、場合によっては脱中心化できることもあり、そうすると本人自身の「気がすまない病」みたいなこだわり行動と、平均的な生活を送っている人たちの行動を俯瞰して見比べ、その異常さに気づくようになります。この段階になると「周りと違って何か異常だ」「損だからやめたいけれど、どうにもやめられない」という悩みが生じてくるようになります。これは、一定の発達段階に至ることで強迫神経症になることが可能になるという意味で、「発達神経症」と呼ばれるものの一群だと言えます。本人が賛成するのであれば、薬物療法にある程度の効果が期待できます。援助者は、強迫神経症レベルに移行したこだわりに対しては、それ以前のチック風こだわり（やり遂げることで密かな開放感を覚える）から抜けさせる援助とは違い、柔らかくのを少し外した対応を敢えてした方がいいようです。真正面からこだわりと闘わず、周辺にある意味あるものに意識がむくように誘います。相手がこの誘いに乗り、一般的な行動に身をゆだねることができるようになると、こだわり以外のやるべきことに集中できるようになり、本人はグッと楽になるようです。ここまでくると、出口は見えたようなものなのですが、ここで援助者が「こだわりをやめられてスゴイ」などという一言多いほめ言葉をかけてはいけません。それによって、再びこだわりに対する意識が焦点化し、精神交互作用が賦活してしまうからです。下手をすると今までの貯金は全部パーになり、一からやり直しになります。援助者は、ほめたくても怵（こら）えて見守る態度、あるいは、相手に花をもたせて自分は心の中でニヤニヤしつつ、黙ってその場を離れるような雰囲気援助するのが正解でしょう。

● こだわり（気がすまない病）の発生機序

それでは、こだわりや、その先に生じるパニックはどのような機序で起こるのでしょうか。こだわったりパニックになるところまで至る人にとって、同一パターンで動くということは可塑性が高く、見通しがつきやすいので、不安を軽減でき楽なのです。理論的に言うと、

t=0からの絶対予測ができれば、未来は全て自分の予想通りになります。もし、これが実現できるのであれば、不意打ちに弱い人にとってこんなに安心なことはありません。換言すると、彼らはエントロピー=0の世界を夢見ているのです。そのための工夫が、こだわりや同一性保持です。ところが、これを実現しようとするとき全く答えが出なくなるのは、この文章を読んでいる人でもなんとなくわかると思います。絶対確実な予測を求めれば求めるほど細部の不明瞭が気になり、それによって不安が増大し、意識性を高めて確実性を得ようともがきます。もがきながら、どうしてもいい情報（ノイズ）まで全て拾って計算式に入れ込むので、ますます答えが出なくなります。それでも無理して答えを出そうとすると、微細な変化で計算結果が大きく変動するため、目指していた安定とは逆の結果、つまり不安定な結果が出てしまうのです。そして、ついには全体が壊乱します。これがこだわりとパニックの理論モデルです。

人生とは選択の連続であるかのように言われることが多いのですが、実は自主的に選択することで前に進む場合よりも、偶発的な事件や避けられない状況のなかで消去法的に選択したことが人生を前に進めることのほうが多いのではないのでしょうか。そう考えると、偶発的な事件や避けられない状況を回避する手段としてのこだわりは、他者を巻き込もうが自己完結していようが、こだわっている本人にとって、長期的には著しく不利益なものだと言えます。また、動作が制限されるために、身体的な不自由度が急速に上がっていきます。可動域が狭まり、バランスが悪くなり、小脳の調節機能も衰え、二次的な身体障害が起こってきます。型にはまった狭い範囲の動作を繰り返すのですから、身体のバランスを歪め、それが様々な疾患を呼び込みやすくします。末梢の動きが貧しいと、中枢神経の活動も貧しくなります。そもそも傾向として歪みやすい神経系が、悪循環のなかで加速度的に失調を起こしていきます。40歳代で、廃用症候群という概念に当てはまるような状態にまで至ることも珍しくありません。

● 予測困難の機序と対策

当該研修では、想像力の特徴の中に、『変化への対応が難しい』という項目があります。さらにこの項目の下位には『先の予測をすることが難しい』とも書かれています。そして、だから『視覚支援』がいいという結論に結びつけられています。全てがこのパターンなので、この研修を受けても相手の側に立とうという意欲は湧きません。全く勉強になりません。僕ならば、援助者が相手の側に立とうとするときに役立つように、次のようなことをつけ加えるでしょう。繰り返しになるところもありますが、大事なところなのでしつこく書きます。

先の事態を予測する力というのは、どうやってついていくものなのでしょうか。まず、自閉スペクトラム症の人たちというのは、過去のデータを参照しつつ今現在（リアルタイム）のデータを処理して先を見通すということが苦手です。当該研修の中では、「先の予測をすることが難しい」と大雑把に（実感してもいないくせに）わかったようなことを言っていますが、実は何もわかっていないと思います。

ちなみに、これは同時処理ですから、個人差はあれど、確かに彼らには苦手な分野でしょう。もし援助者が、その雰囲気にも共感しつつ、相手と一緒に過去のデータを参照しながらのリアルタイム情報処理をして先を予測するという作業をしたら、相手はそれほど不安

に怯えなくて済むでしょう。彼らとて、過去・現在・未来を行ったりきたり（タイムトラベルと言ひ、ホモサピエンスのみにできる心的操作・思考）するサポートを受けられれば、徐々にそのコツをつかむことができるようになります。先述したことの繰り返しになりますが、先案じの不安でビビっている相手がいたら、それは「時進み」状態です。現在地点から先にある、細かな変化のみをひろって近未来の傾向予測をし、それに即応して動くのみで、過去の経験を参照しません。だから、とても過敏で振幅が大きくなり、不安定なのです。そんな彼を見たら、援助者は「彼は、過去の経験を参照しないリアルタイムの完全予測という無理なことをしようとしているな」と気付く必要があります。不安・恐怖がこの傾向を賦活します。この状態においては、過敏が極限に達しますから、ホワイト・ノイズや体内の心音までも刺激物として拾ってしまい、パニックを起こします。ひとが、ちょっとした刺激に反応して爆発するのはこんな時です。こんな時、援助者がさり気なく「それって、ちょっと前にもあったあれと同じだね。あの時はこうやって切り抜けた」と、やや「時遅れ」の態度をとり、相手に過去の体験を参照するように促す（ないしは、そうなるように誘うような雰囲気を出す）ことで、先案じの不安は引っ込み、過去の経験から来る自信が出張ってきます。

また、逆もあります。相手が過去ばかりを参照して、先に進もうにも進めない焦燥感を伴いつつ身動きがとれなくなっている場合です。過去ばかりを参照するというのは、ある意味安定しているのですが、安定の不安定であり、これが膠着状態を続け、抜け出しにくいということもあります。これは「時遅れ」の状態とでも言ったらいいかもしれません。実際に、ある程度安心感を持って生きていくためには、「時進み」に偏って変化のみを拾ってはいけないうし、「時遅れ」に偏りすぎて過去の体験に絡めとられていてもいけません。

また、完全な規則性と完全な不規則性との中間が、生体の生体たるありようです。心臓の鼓動も、胃腸の動きも、呼吸も、脳波も、心も、絶えずゆらぎながらもとのところにもどるようになっていきます。生体はカチコチに固まって身構えているではありません。それだと強い衝撃が来たときに割れてしまうので生きて行くには不都合なのです。たえずしなやかに動きながら、周囲から不規則にふり注ぐ偶発事の中を通り抜けていくからこそ、生き延びていけるのです。あわせて、追い風、向かい風、横風といった環境要因も読みながら、行くべきか留まるべきかを決めるスキルを求められます。僕たち援助者が長い年月をかけて直感的に判断できるようになったのと同じように、援助者は相手における今ココでの判断について助言できるようでなければなりません。

蛇足ですが、変化だけをひろって近未来の傾向を予測し、ほとんど反射的に動く姿は、日本人の自称専門家によく見られます。外来の思想や方法論を土着の文化に馴染ませる（つまり、過去データを参照する）ことなく、いきなり飛びつく様は、動く物になら何にでも反応するタコみたいであり、神経細胞（ニューロン）の数が少ない場合に効率の良い動きかたです。日本の支援者は軽薄だというのは、本当の話なのかもしれません。

● 浅い特性確認と支援アイデア

長々と「想像力の特性」や「こだわり」とその機序・援助について述べてきました。もちろん、限られた紙幅をオーバーしても、全てを語り尽くせるわけではありませんが、一

部分だけでも上記のようなボリュームになります。新しい内容ではなく、平凡な内容だと思えます。しかし、僕が援助をする相手の側に立って考えると、このような骨格になるということは、なんとなくわかっていただけたのではないかと思います。

一方、当該研修において、こういった課題に対する分析や解決の手順としてあげられているのは、前回までにも書いたとおり、障害特性と、それに対応する具体的な行動の出現という直線的因果律です。因果律の説明は、「○○なので、□□かもしれない」という文章になり、○○と□□を埋めるという作業になります。これによって、ひとまず行動の原因を特定しようとしています。課題解決に向けての取り組みとしては、当然といえば当然の作業なのですが、実際には解決に向かっていないことが多いようです。それは、支援者による原因特定行動が、問題解決のために行われるよりも、支援者が支援しない理由を安心して表明できるように使われていることが多いからだと思っています。

因果律については、No.103でも述べましたが、今回も直線的な因果律に偏っています。例えば、この『特性確認シート』内に書かれている「支援のアイデア」を見ると、次のように書かれています。

- ・本人に分かりやすく予定や変更を伝える（時間の視点）
- ・始まりや終わりを分かりやすいようにする（時間の視点・場所の視点）
- ・活動に意味や目的を持つことができる工夫をする（方法の視点）
- ・最初から正しい方法で行うことができるようにする（方法の視点）

このアイデアは、その前にあげた①～③を原因特性として特定した結果、導き出されたものです。

もう少し具体的に説明しましょう。Aさんは、公園を見ると走り出すという問題があります。Aさんを強烈に誘惑する刺激は、水道の蛇口から水を出してジャブジャブやり、その感覚に耽溺するという、年齢的に不相応な行動により得られるものです。問題を解決するためには、原因特性を考えなければなりません。それを先にあげられた①～③の中から選ぶとすると、「段取りを適切に組むことが難しい」「今やることを自分で判断することが難しい」「興味・関心が狭くて強い」あたりになります。これに対する支援のアイデアは、上にある「本人に分かりやすく予定や変更を伝える（時間の視点）」であり、これをもう一段階具体的にして、「事前に次の活動を伝える」というアイデアもあげられています。物理的環境にも原因を求めているようで、「水道が見えやすい」「公園での目的は“水道で遊ぶ”に見えていた」「どうなったら終わりがわかりにくい」「公園に何をしに行っただかわからない」「言葉かけの指示だったので、わからなかった」などがあがっています。これに対するアイデアは一本調子で、基本的に全て「目で見てわかる支援」です。具体例を見れば、写真であったり、絵カードであったり、スケジュールボードであったりします。また、「好きな活動を取り入れ、楽しさを提供する」などというビックリするような上から目線のアイデアまで出てくる始末です。説明は以上になります。もう少し一言一言を拾って書き出してもいいのですが、どのみち同じような話の繰り返しになってしまう、紙幅と読み手の時間を奪うだけなのでやめにします。

ちなみに、当該研修では「目で見てわかる支援をするのはなぜか？」という問いがたてられており、答えも書かれていました。次のとおりです。

- ・自閉症の人は目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えたりすることに苦手さが

あるから

- ・複数の情報を処理することに苦手さがあるから
- ・雑多な環境のなかから必要な情報に目を向けることに苦手さがあるから

と書かれています。しかし、これ以上深い意味を持つ情報は、この資料を読む限り出てきません。浅くて雑ばくだというのが、僕の率直な感想です。

● 忘れられた「コツの文化」

確かに、自閉スペクトラム症の人たちにおいて、ここにあげられている面についての発達が遅れる傾向があるということは、僕も知っています。ただ、これをうかうかと真に受けると、相手の人生を台無しにしかねない決めつけになるなとも思います。

確かに、先の事態を予測することや、変化への対応が難しいと言われる人はいます。例えば、引っ越しをしたときに、引っ越した先では環境が激変します。そのときに、変化を受け入れられず、目をギュッと瞑ってしまい、開眼できなくなる人もいます。本当に苦勞の多い人だと思うのですが、それ故に、コツをつかんでいる人が隣にいて援助することは深い意味を持ちます。援助者が相手に対して、「心配なのだろうけれど、本当は大丈夫なんだ」と話しかけたり、場合によっては、念じるだけでも効果はあります。こういうときに、不思議と何かが伝わるものだということを否定する人は少ないでしょう。しかし、当該研修では、これが黙殺されています。なぜ、このコツを身につけることの大切さを伝えようとしなないのか、不思議でなりません。

ある困難と一緒に乗り切り開眼する体験というのは、例えて言うならば、初めて自転車に乗れるようになったときとか、初めて10メートル泳げるようになったときとか、初めて誰かと一緒に山登りをして山頂に立ったときのような、文脈に依存した記憶です。あるいは、文脈に依存した記憶を持てる以前の体験であれば、初めて立ち、初めて歩いたときに味わったであろう原始共有感覚のようなものも含めた記憶として体内に残ります。その記憶は手続き記憶として身体に刻み込まれ、次の困難に備えることでしょう。変化への対応能力というのは、そうやって過去の体験を身体に記憶に刻み込みながら発達していくのではないのでしょうか。そして、これによって関係発達が進み、それは身体制御や認識の発達と呼応します。

● 支援者養成研修の構造的欠陥

乱れた行動をとる相手への援助の際に、望ましい援助の雰囲気とは、援助者の深くてゆっくりの呼吸に相手の荒い呼吸が飲み込まれて、結果的に相手に鎮静がかかるような共同作業としての雰囲気です。ある程度安心して生きていくためのコツというものは、そうやって人づてに伝授するものです。誰だって、そういう風に、他者と一緒にコツをつかんできているはずなのに、この研修ではそういう人の存在が全く想定されていません。研修で言うところの「支援者」たちに、そういう人になることを求めることもしていません。これが、この研修における構造的欠陥です。援助者たる者、常に相手に生きる希望を与える者であることを目指さなければいけないと僕は思います。「支援者養成研修」というタイトルが嘘じゃないのであれば、まずは、この構造的欠陥をどうにかして欲しいと思います。

● 発達援助の道行き

この研修の一番ダメな点は、発達の視点がないことと、徹底した手順書至上主義にあります。そこで、まずは発達の視点から問題提起します。日本には「知恵遅れ」という概念がありました。つまり、「知恵遅れ」の人たちは「遅れながら、それなりにできるようになっていく」人たちであるという感覚を持ち合わせていました。なにができるようになるのかというと、「目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えること」であったり、「複数の情報を処理すること」であったり、「雑多な環境の中から必要な情報に目を向ける弁別能力」であったりするわけです。また、このような認識能力がそれなりに育つことで、状況判断能力と、その能力を成果に繋げる自己コントロール力も育ちます。どうやって育っていくのかというと、これは全く平均的な子どもたちと同じような順序で育ちます。同じというのは、どれも人と人との関係発達に依拠した成長だという意味です。人と人との関係発達は、その人同士の相互交流が基盤にあり、二項関係から三項関係への発達であり、二者関係から三者以上の人との関係へと拡大していくことでもあります。この変わり目というのが、特に味わい深く豊かなのも同じです。

当該研修で示された支援のアイデアに、「好きな活動を取り入れ、楽しみを提供する」という上から目線のものがでてきましたが、これではここに書いている豊かさは生まれません。「一緒に苦労する」「一緒に楽しむ」「苦楽をともにする」という共同作業としての目標を設定しない限り、人が人として成長発達するということはありません。現代ではあまり語られなくなりましたが、これらはどれも相互扶助の味わいがあり、そのこと自体に意味があります。相互扶助ですから、援助者として得るものもあり、それは援助者側が成長・発達させてもらえる機会でもあります。この研修では、決定的にこの視点が欠けています。

自閉症であろうがなかろうが、認識の発達水準、関係の発達水準、自己コントロール力の発達水準の3つが発達していくことで、精神発達のベクトルは右肩上がりに進んでいきます。もちろん、そのスピードと、どこまで到達するのかには個体差がありますが、発達には保障されてしかるべきものです。また、援助者が相手の段階を見極めつつ、やり取りの質や量が上がっていくように、互いの成長・発達を楽しみにして関わっていくことで保障されるでしょう。

次に、手順書至上主義について問題提起し、これに置き換わるものは何なのかについて述べます。当たり前のことですが、頭のとっぺんからつま先まで自閉症である人などどこにもいないし、特性とやらも固定的なものではありません。公園へ行き、水道が視界に入ったから走り出して蛇口を捻って放水し、ジャブジャブやり出すという問題も、一緒に行く人との関係次第で変わります。彼や彼女への見立てや援助のコツをつかみ、絆を感じられる援助者とのペアで公園へ行くと、彼や彼女は対人関係のほうを優先するようになるのです。人間は、対人関係の数だけ人格を持っているといわれます。二重人格や多重人格は病ですが、健康な人は超多重人格だという意見もあります。僕もこの意見を支持します。たくさんの自分がいて当たり前と思えるのは、健康であるための条件なのです。そう考えると、これから成長していこうという彼らが、一緒にいる援助者によって違った顔を見せられるということは、実は健康的な面でもあるのではないかと思います。もちろん、そこ

から始まって、世の中のルールだとか、他者と折り合うことだとか、自分自身と折り合うことだとか、そういった大事なことを学んで行く必要があるのですが、その起点となるのが援助者との関係です。

- コツの習得について

援助者が相手の人柄を知り、持ち味を生かし、共に成長していくにはコツとしか言いようのないものが必要になります。コツとは、上手くやるためのポイントであり要領です。コツを文章化しようとしてもしきれませんが、何かできるようになるときに必ず必要なものでもあります。つまり、何かを習得しようとするときには「コツ」から逃れることはできないのです。ところがこの研修では、「支援手順書に基づく支援」「関わる支援員全員が統一した支援を提供する」「(支援員ごとに行う支援について) 同じ質を担保する」という言葉が再三出てきます。支援手順書とは、文字通り手順書で、支援者が作業的に施設運営していくための物理的な手順が書いてある説明書のようなものです。手順書をいくら読み込んで実行してみても、手順書という策(ざる)から漏れる神髄を扱うコツは身につきません。自転車に乗れるようになるための手順書をA4×1枚にまとめることはできませんが、自転車の乗り方を体得するコツは身体に刻み込まれ、手順書に書けない行間や背景を埋めてくれます。手順書だけで自転車に乗れるようにはならないけれど、手順書がなくてもコツがつかめれば自転車に乗れるようになります。手順書は陳述記憶なので、いずれ忘れてしまいますが、コツは手続き記憶なので一生忘れません。ことほど左様に、人間にとっても援助者にとってもコツは大事なのです。このコツが、当該研修の中で語られることはなく、それがこの研修に欠落しているものだと言えます。

厚生労働省が令和5年3月30日にまとめた文書に、『強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書』というものがあります。この報告書には、次のように書かれています。

「それぞれの支援者が独自の方法で関わることにより、支援の方法に統一性がなくなり、強度行動障害を有する者の混乱を招くことがある。そのため、事業所内で標準的な支援を一貫して提供するために『支援手順書』を活用し、関わり方や支援を統一して提供することが重要となる。その際、同一の利用者に対する関わり方や支援は事業所間でも統一するよう連携する必要がある」

これを読めばわかりますが、この考えかたが、都道府県で加算を付ける交換条件として実施されている『強度行動障害支援者養成研修』のネタになっていることは明らかです。身も蓋もない言い方になりますが、実はこれが間違いのもとなのです。なぜ、人が人に生きていく術を伝授するのに、「事業所内で標準的な支援を一貫して提供するために『支援手順書』を活用し、関わり方や支援を統一」する必要があるのでしょうか。『標準的な支援』が想定する『標準的な強度行動障害者』がたくさんいるという意味なのでしょうか。僕には全く理解できません。

- 虚構へのアプローチ

人が人を援助するということは、必然的に人格と人格の出会いという形になります。人間の人格は対人関係の数×状況の数だけありますから、単純に考えて、アプローチの

数も同数あるはずですが。10年間援助すると仮定しても、その数は天文学的な数字になります。それを前提として考えると、「標準的な支援」という虚構に基づいて統一した『支援手順書』が現場から心を奪う『悪魔の書』になることは火を見るより明らかです。

事業所にとって統一する必要があることは、手順ではなく目的や目標でしょう。にもかかわらず、報告書にあるように、凄い勢いで手順を統一してしまったら、その手順を押しつけられた支援者が目的を考えなくなるのは自明のことです。人が生まれて来た意味は「幸せになること」以外にありませんが、その意味に沿うことこそが、職業援助者による援助の目的です。その目的を援助者たちのチームが共有することが、それぞれの関係段階に合ったアプローチをそれぞれが工夫する余地が生まれるのです。これは、「パーソン・センタード・アプローチ」と通底する考え方ですが、体温を感じる援助活動の現場には、このような考え方が脈々と流れているものです。

つい最近、東京都福祉局から、福祉施設の送迎車内に利用者が置き去りにされたという事故報告が公表されました。これへの対策が手順書の作成や追加だけで事足りるのだとしたら、既にこの問題は解決しているはずですが。ところが、いくら手順書を作り足しても、この類いの事故が起こる頻度は減りません。職業上の建前ではなく、人として自分自身の感情や態度にひらかれ、ありのままであること、人の命を感じようとする、そういう「生物としての志向性」のようなものが、「手順書を守る」という機械的作業に置き換えられてしまったことが一番の原因でしょう。

その反省にたったとき、僕たちは『標準的な支援』が書き込まれた手順書や、厚生労働省の報告書や、支援者養成研修の内容について、真剣に再考する必要があるのではないのでしょうか。

つづく

令和6年5月15日
高原浩

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的発達症を含む神経発達症や精神疾患のあるかたたちが、実践的な環境で企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な経験を支援者と利用者として分かち合いながら行うことを目指します。

基礎訓練段階からのトレーニングが必要な方にも利用しやすい就労移行支援事業所です。療育的な視点で再評価し、個々にボトルネックになる課題を明確にすることで、具体的な傾向と対策を共有しながら就職に向けての援助を行います。

就職後にできるだけスムーズに職場定着できることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】お問い合わせください

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままだに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることが防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】見学可 実習については応相談

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域社会参加プログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます)

社会適応の障害になり得る発達の凸凹や遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えるときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室 (PC技能訓練)

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。

③ 「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④ 専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

スマホ依存やゲーム依存を予防する学習や、口腔ケアなどの健康管理に関する学習などを普段とは違った雰囲気の中で、楽しく学ぶことができます。

⑤ “自立講座” “OBとの交流会” 等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内 (全て、全国の書店やインターネットから購入できます)

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版(3刷)好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

***全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。**

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルーシブとインクルーシブ教育』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルーシブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中(下記リンクは、案内のみです)

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaltY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

- 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー
- 令和6年6月15日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会 児童・成人部門 職員研修
- 板橋区自立支援協議会 高次脳機能障がい部会

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年5月15日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩